

しん、と世界は静まりかえっていた。

篝火だけ照りつけているが、全ての兵はまるで死んだように眠りこけていた。彼の腹心であろうと、それは変わらなかった。

嵐の前の静けさ。夜襲があったとしたら、きつと誰もが跳ね起きて剣を手に、盾を構えることだろう。白い薔薇が染め抜かれた旗は翻り、その身分を示していた。プラントジネット家の末裔、ヨーク朝の王。

腹心たちも少し離れた天幕で静かに休んでいた。王の眠りを妨げないように、と言う意志の現れであったのだが、それも些か問題があったのかもしれない。

近衛の兵も眠りこけていた。恐ろしき王、腹心であろうと一瞬の判断にして首を切り捨ててしまう王、己の失態を見逃さぬ王であるにも関わらず、彼らもまた休んでいたのは偶然か、それとも翌日の戦に備えての事か。

敵対者たる赤薔薇の君、リッチモンド伯が狡猾に寝首を搔こうとしていたのなら、とうに彼の命は無かっただろう。それほどに深い眠りに彼は落ちていた。だから、彼は気付く事が出来なかったのだ。衛兵たちが気付く事が出来なかった、その影に。

リチャードが目を醒ますと、何者かが天幕に居た。王になる前から、武勇には自信があった。如何に醜い顔であろうと、如何に醜悪な性根であろうと、戦で剣を振るう事について何ら関係がある訳ではない。戦は顔で決まる訳ではない。

彼にとつての不幸は、母にすらその出生を疎まれた事であつた。出撃時の声は、リチャードをこの世に生んだ事を嘆き、その身の破滅を呪う声であつた。気が違つてゐる母と、気が違つた先王の妻を置いて彼は戦へと立つたのだ。

敵軍は幕屋からも視認出来ていた。白薔薇の旗は、丘一面に翻つていた。先ずれば戦を制する。それはリチャードの戦において最も必要なものであつた。

そもそも、数は自軍が押している。スタンリー男爵軍にしろノーサンバランド伯軍にしろ、自軍の後詰めとして控えている。適宜繰り出して行けば良いだけの事だ。

敵軍の野営した場所はお世辞にも場所が良いとは言えず、陣を築くにも時間が掛かつていたのだ。十分な休息も取れぬまま、戦に突入するような愚を犯す者共でしかない。リチャードにとつてみれば、その程度の相手でしかなかったのだ。

王の威光を示す為に、反逆者の首級を掲げその肉体を辱め、己が王たる証を示してくれようぞ。リチャードの目はそれだけを考へていた。叩き潰して、敵対者リッチモンドの首をもぎ、その体を四分五裂にして豚の餌にでもしてくれる。

リチャードはそう堅く意志を固め、眠りについた——そのはずだった。

目の前の何者かは、リッチモンドからの刺客か。そう判断したリチャードは、剣を抜き誰何する。

「何者だ。此処が余の幕屋と心得ての事か」

その何者かは、ただひたすらに手に抱えた薄絹を撫でていた。その絹は向こうが透

ける程に薄く、細い指先が触れる度にさらさらと音を立てる。その影が顔を上げると、長い髪がゆらりと揺れた。

「刺客ではございませんわ。陛下」

女の声だった。絹が擦れる音の中、風の鳴るような声に耳を傾けたリチャードは目を瞬かせる。女の暗殺者はおかしいものではないだろう。だが、その声には殺気も意志も感じられない。

リチャードは立ち上がり、幕屋の外、篝火へと手を伸ばした。灯りが足りない。美麗な女であれば手を付けてやるのも悪いものではない。戦の前とは言え、英気は養われていた。女一人犯す事など、彼にとつて良心の呵責も感じるものではない。何人も殺した。兄も殺した。主君の子も殺した。腹心も殺した。彼が娶った王妃もまた殺した。殺しの罪と比べて、姦淫の罪が重いと言う事があるだろうか。全ての権力は、彼の手にあった。

その権力は、血と苦悶と呪いに満ちていた。

彼は既に大罪人であった。首都の塔に閉じこめた先王の遺児たちの首を絞め殺したと聞いた時には、その醜惡な笑みを威厳で隠す事が精一杯だった。

炎で女性の顔が照らされる。側頭部を結った、幼くも妙齡にも見える女性。いや、少女と言うべき方が正しいか。リチャードは彼女に刃を向ける。

「どうされたのですか、陛下」